

第 78 号

令和 7 年 3 月 31 日 発行

華洲会60周年記念大会
研修会レポート など



発行者

公益社団法人 関西吟詩文化協会

公認 **華洲会** (広報紙)

発行責任者
編集責任者

会 長 山口華雋
広報部長 秋月奎翁

60周年記念大会大成功

令和六年十二月十五日(日)、ホテル阪急テンターナショナルにて、華洲会六十周年大会が盛大に開催されました。

大会に向けて準備会議を重ね、限られた時間のなかでリハーサルを行いました。当日は大会役員・会員ともに午前八時半より集合、準備にあたりました。

本紙では、役員・会員による準備へのコメント、大会を終えてからの感想で大会を振り返ります。

謝 辞



大会会長
山口 華雋

皆さんこんにちは。華洲会創立六十周年。一回りしたわけですね。これからまた新しい一年のスタートです。来賓の先生方におかれま

しては、大変寒い時に遠くからお越しいただきましてありがとうございます。会員の皆さんが頑張っていたからこそ、華洲会



がこうして今年もあるわけで、こ

れからまた皆さんと一緒に手を取って進んで参りたいと思います。この大会に準備をいただいた先生方、会員の皆さん方、心から厚く御礼を申し上げます。創始会主三浦華洲先生から「華」の字を頂いて、今も持ってるのはとうとう私一人になってしまいました。三浦先生が昭和三十八年に豊中支部を立ち上げられて、それからその弟子たちが非常に頑張って、親から子へ子から孫へと、そして今この孫の世代の人たちがたくさんのお弟子さんを集めていただいています。今回青年部たちにも頑張っていたきました。それから剣詩舞では、棉生珠童先生へご無理をお願いしまして、わざわざ大東まで教えに来てもらってます。そのおかげで、皆さん剣詩舞から詩吟に入っていただくようになってきました。このあと、バンドの生演奏での詩吟をお

送りしますけれど、バンドに詩吟入れたら面白い、詩吟って知らなかったけど面白いということなんだんと輪が広がっています。若い世代がまだ詩吟を知らない世代を呼んでくるといういい方向に向かうんじゃないかと期待しています。ところで、私いつも教室へ寄ったところ、その隣に「歌を楽しみましよう」という教室があるのを氣になつてます。そこは、昭和の歌謡曲をみんなが集まって楽しんでおられる。そういう方々に詩吟に誘おうと思ったら、まず俳句や和歌を楽しもうというような会を作り、ついでに詩吟するのはどうですかいう形で詩吟に楽しんでもらうというようなことを企画をしたいと思っています。やはり今、吟界の人たちが楽しめるようなことに加えて、次の新しい人たちに道を開いてい

かなあか
んという
ことも思
ったりし
ていま
す。自分
たちが楽しめるものは思いつき
楽しんでくれと皆に言っています。
華洲会六十年という節目を迎え、
新しい一步をこれから踏み出しま
しょう。その一步は、何もなしでは
踏み出せません。今までの詩吟が
必ずしも絶対ではありません。詩
吟の新しい方向へ進むためには、い
ろんな努力を重ねて、どんなこと
でもいいから、一步前へ進みましょ
う。私は八十二歳です。これだけ
元気でおれるのは、やはり詩吟の
おかげです。七十周年には、今の
会員を減らさずに迎えたい。それ
が願いです。今日は本当に先生方
ありがとうございました。会の皆



さん本当にありがとうございますました。

開会の挨拶



大会委員長

奥山 紅雫

皆さまこんにちは。冬の日だまりがことのほか暖かく感じられる寒冷の候、ご来賓の先生方には大変お忙しい中、まげてご臨席賜り誠にありがとうございます。

私ども華洲会は、創始会主、三浦華洲先生が創立されて以来、六十周年を迎えることができました。

三浦華洲先生をはじめ、先輩の諸先生方のおかげをもちましてここまで歩んで参りましたが、我々も吟界の流れに逆らえず、高齢

化またはコロナ禍もあり会員減少に歯止めがかかりません。

しかしながら、教室に行けば仲間が居て、楽しくおしゃべりをしながら詩吟を楽しみ、明るく笑いの絶えない、みんなが集まる場所。そこには支え合う人間関係が、吟を通してあるのです。それは素晴らしいことだと思います。

吟界の未来を託して、少しでも多くの方に知ってもらいたい。今回、若い方たちに「詩吟を知ってもらい、関心をもってもらえるために、どんな風なことをしたい？」と投げかけてみました。それが今日

お送りする「末広の演」です。新しいジャンルを開くとともに、日々の勉強、仕事の合間を縫ってしばし吟剣詩舞に向き合い、お稽古に励んだそれを発表する場としました。精一杯頑張りますので、どうぞ温かなまなざしで見守って下さ

いますようよろしくお願い申し上げます。伝統芸能である吟剣詩舞道を守っていくことが、私たちの使命だと思っています。

会員の皆さま方には、日頃より物心ともにご協力くださいます。ありがとうございます。感謝の気持ちとともに、これから末永く命尽きるまでお付き合いくださいますようお願いを申し上げます。ただ、私からのご挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。



成功を期し万全の準備を

大会副実行委員長

坂本 亮綜



二十四年間の会員歴を振り返り、時間の経過と共に積み重ねられた経験と思い出に感慨深い。

故三浦華洲先生の十七回忌追悼式を含む初体験の四十周年記念大会は、三浦先生の業績と人柄を称える重要なイベントに感銘した。広報部での記録写真撮影担当としての役割や、進行役としての責任を果たした過去の周年記念大会の経験は、今後の活動においても貴重な財産となる。

五十周年記念大会では、更なる飛翔『未来に向って』をコンセプトに、事務局長と共にプログラム作成に尽力。映像と音響の担当として、前日のリハーサルでの失敗から

徹夜での修正作業を経て、成功に導いた経験は特に印象的である。

コロナ禍による五十五周年記念大会の中止は残念であったが、六十周年記念大会の準備に向けての努力は着実に進行中。実行委員の選任、企画構成、招待客、会場選び、予算検討など、正副常任理事会での協議を重ね、六十周年記念大会の成功に向けての準備が進んでいる。

今回もプロfram作成に実行委員長と共に尽力、担当の音響・映像・記録チームは、経験豊富で技術的に熟練したメンバーで構成されており、当日の成功に向けて万全の体制を整えている。

会員の皆様の支援と協力を得

て、六十周年記念大会を成功させるための総力を結集し準備が進められている。

このような長い歴史を持つ華洲会の一員として、これまでの経験を生かし、

今後も華洲会の発展に貢献していくことを期待。六十周年記念大会が、過去の成功を称え、

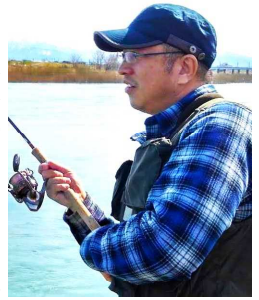
未来への新たな一歩を踏み出す素晴らしい機会となることを願っている



六十周年、先生方の努力に感謝！

青年部長

上野 釣恵



日頃から、青年部を温かく見守っていただき、誠にありがとうございます。

青年部員は、私を含めて全員、仕事・子育てが一番忙しい世代のため、なかなか全員揃う機会が作れません。そのためご報告できるような目立った活動もなく、大変申し訳なく思っております。

そんな中でも、コンクールなどで久しぶりに会う青年部仲間の吟を聴くと、皆もれなく前に聴いた時より上手くなっていて、日頃からしっかり練習をしているのが伝わってきます。少し救われた気持ちになります。やっぱり皆、詩吟が好きなんです。そして、詩吟を楽

しく続けられ上達できるのは、先生方の温かいご指導があってこそだと思つと、感謝の気持ちが込み上げてくるとともに、自分も頑張らなければと、通勤途中の車中の吟がいつもより一回多くなったりします（政安先生、なかなか教室に行けなくてすみません）。

さて、六十周年大会まであと三か月となりました。これが読まれる頃はもう目前でしょうか。私より四歳年上の華洲会。多くの先生方が築いてきたルールに乗っかって、私自身は、ただ、のほんと楽しんでできました。しかし、どういうわけか、昨年からは総本部でも青年部長という役割を担うことになり、他会派の青年部員や総本部の先生方と交流を重ねていく中で、いろいろな経験をさせていただき、少しだけ先生方が築いてきた歴史に触れることができたような気が

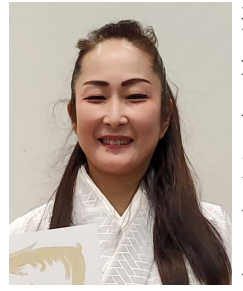
しています。

これからの吟界は、決して明るい未来だけではないと思います。それは、華洲会においても同じだと思いますが、先生方が六十年間築いてきた華洲会の今後の発展に、少しでも力になれるよう、微力ながら頑張りたいと思っております。

これからも、温かく優しいご指導とご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。



華洲会六十周年記念大会を迎えて



えて
雋詠照月支部

川田 紅祥

五十周年記念大会がついこの前
終わったように思っていたら、いつ
の間にか十年も過ぎていたなんて
：。

五十周年大会の時は、詩吟を初
めて間もないころで、今回と同じ
く、奥山久美子さんと、連吟をし
たのを覚えてます。吟題は「舟中
子規を聞く」でした。

あの頃は声を出すのが精いっぱ
いで、人前で歌う事も苦痛でした。
たった二分の間でも、十分くらい
の感覚でした。

今回も同じく奥山久美子さんと
ペアで出場させていただきました
が、独吟、演舞という、また違った
演出をさせて頂きました。

あの頃と違い、人前で歌う事に
も慣れて声も普段ならあまり苦し
くなく出せるようになっています。
それでも、どういう訳か今回も
声を出すのが精いっぱいなシチュエ
ーション：ほんと、苦しかったで
す！

青年部のドラム・ギター・三味線
のコラボも素晴らしかったです！

十年間でいろんな事がありまし
たが、今もこうやって趣味として
詩吟に携わっている事を幸せに思
ってます。

先生方にも顔も覚えて頂き、他
流の皆さんともお話できる機会も
持て、本当に詩吟を始めて良かつ
たと思っています。以前は、「あの
花魁をやった子」で通ってました
が、もう「高知の川田さん」と言っ
てもらえるようになりました。

また、芸は身を助けるというよ
うに、職場でも吟や舞を披露する

事で皆
さんに
喜んで
頂く事
も出来
ていま
す。

七十
周年記
念大会
は、お

そらく今の青年部部員がメインで
活躍するようになっていいると思
います。今のメンバーが欠ける事な
く、さらに増えている事を願って
精進してまいりたいと思っていま
す。



六十周年記念大会を終えて

雋詠寺川支部

加納 奎穰



この度は華洲会

創立六十周年記念大会に参加させて頂き誠にありがとうございます。青年部の活動にあまり参加していない私にとって今回男子合吟メンバーに入れて頂いたのと剣舞の添吟の代役まで頂いた事は嬉しさと同時に身の引き締まる思いでもありました。

いざ本番では気を失いそうなくらいの緊張感でしたが何とか他の演者の方々の足を引っ張らず終える事ができ安堵感でいっぱいでした。人生初めて着た紋付袴は亡き祖父の物だったのでひよっとしたら祖父が天国で私の背中を押してくれていたのかもしれない。

この大会で貴重な経験の場を私

に与えてい

ただいた華

洲会の皆

様に感謝

しながら

これから

も詩吟を

より一層

好きにな

り楽しん

でいきたい

と思いま

す。重ね重ねありがとうございます。した。



あれから十年とちよつと経つて

雋詠京都支部

秋月 奎翁



十二月十五日、

ホテル阪急インターナショナルに

て、六十周年記念大会が行われた。開催自体はコロナなどもありしばし空白期間を挟んでのものだったが、創立より還暦を迎えてなお継続しているわけだから、なかなかスゴイことである。

細かな経緯は省くが、私が中学以来休止していた詩吟を再開するきっかけとなったのは、華洲会五十周年大会においてであった。それから早十年（とちよつと）が経過したことになる。正直なところ、再開した当初は今日まで続けるとは予想していなかった。色んな場所で手伝いをし、あれやこれや関わっていくうちに、いつしか数ある趣味の一つに、詩吟ががちりと加わっていた、といったところだろう。

しかし、十年ちよつと習っているにもかかわらず、一向に上達せず（単なる練習不足なのだが）、お役

だけは色々回ってきて結構ハードな世界なのに、何故(今のところ)嫌気も差さずに続けていられるのだろうか。

それはきつと、漢詩(漢文)が好きであること、声を出すことで身体的に作品の詩情に触れること、家族や仕事以外の仲間と過ごす時間を尊く思えること、吟界の先人の歩みを尊重する姿勢、そして世界観がおおらかなこと。このあたりが、僕が詩吟を好む理由だろうと思う。

年を重ねるごとに様々な心境や身上や体調の変化がある。私たちが吟ずる漢詩や俳句や和歌は、詩文はそのままにあるが人生の折節の変化に応じた姿を見せてくる。だから同じ題でも、時に勇気づけられもするし涙するときもあるのだ。人生山河の寄り道としてあってくれる、善き学びの世界なのだ

など思う。

ともあれ、関係各位におかれましては大変お疲れ様でした。これからも、皆さまに目一杯ご迷惑をおかけすると思いますが、宜敷お願いいたします。

GRAPH



棉生流による祝賀の舞



斬新な「河内路上」のアレンジ！



女性役員による合吟。

吟題は三浦華洲先生「偶成」



元田 永孚「中庸」



津軽三味線とドラムとともに。



頼山陽「遊嵐山」



石川丈山「富士山」



舞台セットも完璧です。



「末広の演」の司会、
ありがとうございました。



式典の司会、
お疲れ様でした！

REPORT

令和五年十月三十一日
(火)、企画部&女性部の
共同企画により、「関ヶ原
吟行会」が行われました。
バス二台貸し切り、およ
そ五〇名で実施され、大
いに盛り上がりました。
吟行会の参加記をいただきました
ので、ここにご紹介いたします。

関ヶ原研修会に参加して

川西豊友支部 東野 昭

楽しかった・・・！帰宅しての開
口一番出た小生の第一声です。

それほど企画、幹事さんのお
世話、スケジュール、昼食等小生に
とっては久しく評価満点の小旅行
でありました。多くの関係の方々
に感謝する次第です。

新大阪駅前を貸し切りバスで出
発後早速朝食兼用のサンドイッチ
及び袋菓子配られすぐに口にし

ている方もあり各自マイペースで
美味しくいただきました。

やがて最初のサービスエリアで
小休止。飲み物等購入後再乗車し
この後の道中おなじ支部のお仲間
でしようか談笑が続く。よくネタ
が切れないものと思った。

正午前に関ヶ原町に到着直ちに
関ヶ原古戦場記念館に入場。小生
は入らず記念館の道を隔てた対面
に関ヶ原町役場を訪ね展示資料を
見て回り観光課にて地図資料を頂
き約五十分周辺の有名な武将の陣
屋跡を数力所健学してきました。
周囲を小高い山に囲まれ合戦地と
される比較的平坦地で約十六万の
戦士が刀、槍、鉄砲で戦いわずか
六時間にて決着ついたという信じ
がたいことが起きたわけです。死
者両陣合わせ二万余千人とのこと
です。当時は今のような平坦地で
はなく杉檜等の森林であつたらう

と思われる丘陵地に東京の国立競
技場の二倍の人間が入り乱れて争
った光景を想像するとき陣屋から
見るとまさに壮観であろうと推測
しました。

一廻りしたところで勝者の棟梁
徳川秀忠の命により造営された二
か所の首塚のうち一か所にお参り
した。敵味方戦死兵士は差別なく
懇ろにお祀りする日本武士道の精
神を見た思いでした。

再びバスに乗り、遅い昼食会場
へ近江牛のすき焼きに舌鼓、大変
美味しかったです。

帰途はバス内でカラオケで盛り
上がり、予定通り新大阪駅前に到
着。お疲れ様でした。



東西両軍の史料もたくさん展示されています。



車内でカラオケを楽しみながら現地へ向かいます。



館内の撮影スポットで



関ヶ原古戦場記念館にて



全員集合！お疲れ様でした！

詩吟^{ぎん}じませ!

山基仮名・著／FOD

BOOK REVIEW

ついに、詩吟をテーマとしたコミック作品が誕生しました。タイトルもズバリ、「詩吟^{ぎん}じませ!」。早速あらすじを紹介しますと「詩吟教室を営む乙女は、経営難から抜け出すために生徒獲得に必死の毎日。恋に夢に自分のことにはおろそかで……そんな乙女も、二十八歳。ある日、元凶ともいうべき母親の墓子が突然帰ってきた。もう大人にならないといけないけど、消化しきれてない過去に乙女は母親とどう向き合うのか……。こじらせ大人女子の成長と恋の物語。」

(作品ページより)」とあり、詩吟教室を運営しながら、親・吟友とすったもんだを繰り返して……ギャグありラブコメ要素もあり、登場人物も個性豊かに描かれた、続きが楽しみな

内容です。現在は電子版のみの発売、紙のマンガとして書店店頭に並ぶのが待ち遠しいです!



編集後記

『華』七十八号をお届けします。毎度長らくお待たせし、誠に申し訳ありません。

今回は、華洲会創立六十周年記念大会の振り返りも兼ねた内容になっております。山口会長が謝辞で話されていたように「会員をもうこれ以上減らさない」を第一にこれから大会行事に臨みたいですし、また奥山副会長が言われる「吟を通じた人間の支え合いの場づくり」が、華洲会のみならず吟界の維持・発展につながっていくのだらうと思います。

次回は、もう少し早めに発行したいと思います。そこで、次回テーマを設けさせて頂きました。「皆さんの持ち吟」については是非原稿をお寄せください。お名前・吟題・理由などご自由にご投稿ください。投稿方法は、左記のとおりです。よろしくお願いいたします。

大阪府三島郡島本町青葉三ー二ー五ー五〇一

秋月 俊也 宛

folkest_orient@yahoo.co.jp

(メール)

akkii_kiserukun(LINE)

